慈光

第八卷　第八號

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十一年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第八十九号）

目次

一闡提の救済……花田正夫…（1）
東方偈に就いて……福島政雄…（5）
歌心その折々……柳瀬留治…（10）
獅子王の話……ジャータカ物語…（12）

一闡提の救済

花田正夫

仏教で、救ひ難い者として、五逆、謗法、闡提の三種類の人々を挙げてあります。

五逆とは、父・母を殺し、聖者をそこね、和合僧を破り、仏身から血を流すものであり、

謗法とは、正しき御法をそしり、正しき道に生きる者をそしるものであり、

一闡提とは、断善根の衆生とも、信不具の者とも云はれ、かつては仏に帰依し、多少の善根をも修してゐた者が、何かの機縁で仏にそむき、仏を捨て、法をかへりみなくなり、身に持つ煩悩のたけり狂ふままに、五逆の罪を造り、謗法の輩となりはてた者であります。

この三種の人々は、声聞や、独覚や、菩薩の手ではどうすることも出来ない、全く手に負へない人々であります。このことについて想い浮ぶのが讃岐の庄松同行の『御使僧さんの手に合はぬ』の一語であります。

大阪の蓮光寺が高松御坊へ御使僧に下り、かねて庄松の信者なるを聞いて居り、一度庄松と示談が仕度いと、人を介して庄松に伝へると『御使僧さんの手に合ふか。おらには阿弥陀様さへ持てあましたのじゃ〳〵』とこたへた由であります。

又庄松が或時、或人から『隣り村の鉄造は罪を犯して牢屋へ行き、終に牢死したのぢやが、今は何処へ行つたであらう。あんな者でも御浄土へ参られようか』と聞き『参れる〳〵。おらさへ参れる』と答へて居ります。

ここに庄松自身が、難治、難化の三種の重病人はそのまま自分の姿であると深く徹して味つて居り、弥陀一仏のすくひばかりと、また深く徹底して味つて居ります。そこに、仏より頂く信心の智慧が自由自在な仂きをあらはして居り、経を読まずして経意に叶ふ信徳がおのづとあらはになつて居ります。

さて、五逆、謗法の者をして、その罪の深さを知らしめて、その者を摂めようがために、弥陀仏の第十八願に『唯、五逆と正法を誹謗する者を除く』と、きびしく苛責し、強く摂取せられて居ります。そしてこの二つの機類の代表者、大先達は阿闍世王也と、聖人は篤く讃仰されて居ります。

次に一闡提の代表者は、涅槃経に説かれてゐる善星比丘であります。善星は、仏の御子であり、後に仏の御弟子となられて、仏道を修し、善根も積み、修行も進んだのでありますが、遂に仏と離れ、法を捨て、五逆と謗法の生活におちて、狂ひに狂ふ煩悩のままの生活を続け、現身から地獄に沈むのであります。

さうしたことがあつたので、迦葉尊者は

『仏世尊よ。仏はあらゆる衆生の根機に、過去、現在、未来の宿業を知りとほして居られるのに、何故に、仏に叛く如き善星を仏弟子になることを許可せられたのでせうか』

とおたづね申すと

『善星比丘が、自らの罪によつて墮獄することはすでに知つてゐたけれども、若し彼の出家の申出を許さなければ、王族の身だから、カビラ城の王となつて、仏法の大敵となることも解つてゐた。そこでせめてのがれられぬ罪ながらも、その罪のすこしでも軽かれ、尠なかれと願つて、出家を許した』

と答へられて居ります。

又涅槃経の梵行品では、父を殺した阿闍世王が、自分の罪の重さに悲泣し、身心共に大苦悶におちて『我を救うて下さる方はないか』と申した時、耆婆大臣が見舞うて『釈尊こそ大王を救ひ得る人である』と答へると『親を殺し、現に膿血の流れる身とて、誰一人近よる者もない、この大罪人を、仏が迎へて下さり、法を説いて下さるはづはない、そんなことはあり得ない！』とサザエが蓋を固く閉ぢた如く、こばみへだてて心をひらかうとしない時

『仏陀は一闡提のためにもねんごろに法を説いて居られます。大王は五逆の罪はありましてもいまだ闡提ではありません。仏は必ず大きな慈悲をもつて法を説いて下さるに違ひありませぬ』

と言上すると、阿闍世は

『仏がどうして一闡提に法を説かれようぞ。聞くところによれば、闡提とは、根の朽ちた枯草同様で、いくら法水を注いでも芽の出るためしもなく、仏を信ぜず、法を求めず、唯煩悩にたけり狂ふことしか出来ない、さうした者のために仏がいくら法を説かれても所詮無駄である。さう

いふ無駄事を仏ともあらう方がせられるはづがない』

と聞きとがめた時、大臣は一段と力をこめて

『大王の御説は一応御尤もであります。仰せの通り仏菩薩が如何に法を説かれても、一闡提の身には馬耳東風で何の甲斐もありませぬ、地獄が一定であります。

然し仏の大悲は現世のみではありませぬ。三世をつらぬいて居ります。今生で如何とも為し得られなくとも、何時かの時に救ひのよすがとなれかしと念じて説法せられて居り、我々のやうな智慧の浅短な者にはその深い思し召しは測ることは出来ません。さういふ深い思し召しから、仏は闡提の機にもなほ惜しみなく法を説かれるのであります』

と、大王に説いて居ります。

さて斯様な底のなく深い仏の大悲を蒙りながらも、遂に善星比丘は一闡提となつて無間地獄へおちるのでありますが、仏は更に、その地獄の境界が如何に苦悩に満ちてゐるかをすでによく知り尽くされながらも、善星のあとを追うて地獄におり立たれ、善星比丘の何時の日にか浮び上るのを待ち給うて、無量の苦難に堪えて下さるのであります。

五逆と謗法の阿闍世に『阿闍世のために涅槃に入らず』とのべられる仏陀の大悲は、同時に、闡提の機、善星比丘を救はずば涅槃に入ることは出来ないと誓うて下さることでありませう。

聖人は、この仏陀の矜哀を感佩されて

『是を以て、今大聖の真説によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓をたのみ、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治し、斯れを隣愍して療したまふ。たとへば醍醐の妙薬の一切の病を療するが如し。

濁世の庶類、穢悪の群生、金剛不壊の真心を求念すべし。本願醍醐の妙薬を執持すべきなり、まさに知るべし』

と渇仰随喜せられて居ります。

さてもう大分前のことでありました。或方から

『キリスト教も悪人を教ひ、迷へる者を救ひますが、真宗の悪人を救ふといふのと同じではありませんか』

とたづねられたことがあります。其時は主に罪の許されるといふことと、救済せられるといふことの差を考へたやうでありますが、今この一闡提への救済といふことに着眼しながら、世界の二大譬喩とも申すべき、聖書中の『蕩児帰る』と、法華経中の『長者窮児の譬』を対比します時、ハツキリした答へが見出されると思ひます。

『蕩児帰る』の譬では、親をすて親をあざむいて去つた子が貧乏の底にうらぶれ、遂に我身の罪を懺悔して父の家に帰るのであります。

『長者窮児』の譬では、親にそむいて五十年、うらぶれ

て流浪するうちに、父に見出され、あらゆる善巧をめぐらされて最後に親の全財産をすべて譲りうけるのであります。そこに両者のうち、一つは罪を犯しても親を知り、罪を悔い改めて帰るのでありますが、後者は、親を忘れ、罪をも知らず、救ひの手がかりを全く失うてゐる窮児を親が求めて、親の育みの力で親を知らしめ、遂に親と同じ身にして下さる。さういふ所に大切な違ひがあります。

所謂、最後の日「我れ祈る能はず、祈る力もなき者を救ふ教はなきか」と叫んだ国木田独歩氏の悲惨な叫び声と共に、闡提に法を説いてやみ給はぬ仏心のまことに若し独歩氏があひ得たならばと、何時も悲しい事実として想ひ出し且は独歩氏と等しい身に、どうした深い御恵みを蒙つてか大悲の御心を聞かせて頂く身の幸慶を仰ぐのであります。

池山先生は明治卅四年頃ベルリンに留学して居られ、丁度その頃ニイチエは死んだのでありますが、そのニイチエの「超人」といふ書を引用されて「彼は人間の経験で最大なものは、自分で自分を見下げはてる時だ」というてゐるが、それだけであれば如何に偉大な経験であつてもそれはひかりのない、救ひのない、唯悲惨といふにすぎない。そこまで行つて彼は一切の光を失つて絶望の渕に沈んだ。若しニイチエが聖人の言葉、弥陀仏のまことを聞いてゐたら、と思ふとたまらない想ひがする。如何に宿善純熟すといへども善知識なくばいたづらごとなりの聖句も想ひ併せられる、と述懐されたこともここに想起され、我等の幸慶をいよ〳〵喝仰されるのであります。

昭和卅一年盛夏の日

伊勢法語

村田和上

偉らい人が来て、信念が確立して居らぬと処世の上にウロヅクから参詣に来たと言はれるので

『お他力を頂いてもウロヅキます。ウロヅク奴ぢやからお他力に助けて頂くの』

と申しましたことぢや。

○

美濃から参詣の一老婆

『出かける後生となると、真暗闇で、お念仏申して居りましても張合が御座りませぬ。安心安堵の身にして頂き度う御座ります』とおたづねすると、和上は

『出かける後生とは、赤ん坊の言ふことぢやない。大人の言ふ事ぢや。赤子、這ひ児には出かける力がないのぢやから、親が抱いて連れて行つてくれるの——』

○

…どうしても、何処にとり柄のある訳でなし。捨て置いては何処へ落ちこむかも知れぬといふわたくしを…

東方偈について（三）

福島政雄

諸仏、菩薩に告げて、安養仏に覲えしむ
法を聞き、楽しみて受行し、疾く清浄処を得よ。
彼の厳浄国に至りては、便ち速かに神通を得
必ず無量尊に於て、受記して等覚を成ぜん。
其の仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲へば
皆悉く彼の国に到り、自ら不退転に致らん。
菩薩至願を興し、己が国も異ること無けんと願ず
普く一切を度せんと念じ、名顕れて十方に達せん。
億の如来に奉事し飛化して諸刹に徧し
恭敬し欽喜し、去いて、還りて安養国に到る。
若し人善本無くんば、此の経を聞くことを得ず
清浄有戒の者、いまし正法を聞くことを獲。
曾更て世尊を見しもの、即ち能く此の事を信ず
謙敬にして聞きて奉行し、踊躍して大に欽喜す。
憍慢、弊、懈怠は、以て此の法を信じ難し
宿世に諸仏を見しもの　是の如きの教を楽聴せん。
声聞或は菩薩　能く聖心を究むる莫し

譬へば生れてより盲たるもの行て人を開導せんと欲する如し。

如来の智慧海は　深広にして涯底無し
二乗の測る所に非ず　唯仏のみ独明了せり。
たとひ一切の人、具足して皆道を得
浄慧本空を知り　億劫に仏智を思ひ、
力を窮め講説を極め　寿を尽すとも猶知らず
仏慧の無辺際なる是の如く清浄に致る
寿命甚だ得難く　仏世また値ひ難し
人信慧あること難し　若し聞かば精進に求めよ。
法を聞き能く忘れず　見て敬ひ得て大に慶ばば
則ち我が善親友なり　是の故に当に意を発すべし。
たとひ世界に満てらん火をも必ず過ぎて要めて法を聞
かば、かならずまさに仏道を成じ、広く生死の流をす
くふべし。

「諸仏、菩薩に告げて安養仏に覲えしむ」こゝは私に非

常に味ひの深い処と思ふのでありますが、諸仏、これは今の十方諸仏でありますが、今日の私としてはその諸仏と云ふ内にはこの世界の東洋西洋昔から今に至る迄のあらゆる哲人聖人、さういふ風にあがめられてゐる人々を諸仏と云ふ内に含めて考へますのであります。さうでありますから孔子もソクラテスもキリストもプラトンでありましても、カントの様な哲学者でありましてもエマースンの様な哲人でも、さう云ふ東洋の人も西洋の人も昔の人も今の人もさう云ふ聖人哲人賢人と云はれてゐる人々を皆諸仏と云ふ内に含まれてあると私には味はせられるのであります。その諸仏が菩薩に告げて安養仏にまみえしむと。この言葉に今申しました色々の人々を含めて考へます。さうするとつまりさう云ふ東西古今のさう云ふ尊い教を説いた方々の教と云ふものは、結局私を安養仏に往覲出来るやうにするその為であると云ふ事になりまして、上巻の時一寸申したと思ひますが諸仏弥陀と云ふ言葉もあるやうでございました。でこの浄土宗の教は弥陀一仏でありますけれどもキリスト教との違ひを申しますならば、キリスト教はやつぱり排他的なところがあります。　それから浄土真宗の教に弥陀一仏、その一仏弥陀には諸仏が包容されてあるからこの諸仏弥陀と云ふ言葉もある程でありまして、そこがキリスト教とのはつきりした違ひ目になるのではありますまいか。そんな事を考へてをりますのであります。兎に角こゝの味ひは今申しました様にあらゆる聖人賢人も結局私を安養仏にまみえしめ給ふと云ふ事が終局の目的と云ふとどうでありますか。結局まあさうなるのであります。

それでこのやつぱり阿弥陀仏のお言葉になります。「法を聞き楽しんで受行し、疾く清浄処を得よ」でありますから、浄土に往生するといふ事になるがよろしいと。そしてその厳浄国、荘厳なる浄土に往くといふと神通力を速に得ると。そして無量尊に於いて今の授記して頂いて仏の覚りと等しい覚りといふ事になる、そしてその安養仏、阿弥陀仏の本願力と云ふものがあつて、その本願力といふものは名を聞いて往生しようと思へば皆その仏の浄土に生れてもう決してあとしざりしないと。退転せずと云ふところまで行くと、この「其仏本願力。聞名欲往生」と云ふところは、これが丁度あの十八願のお心持ちを云はれてあるところであると、かうなつてをります。尤も昔の御講師はもちつと悉しくこゝが第十八願でそれから十七願それから十一願がこゝにあたるとこまかに云つておいでになりますが、さうまで云はんでも大体こゝは十八願のお心持ちを述べられてゐる所だと受け取り度いのであります。

それで菩薩は至願と云ふのは至上願、この上も無い願を興して自分の国も阿弥陀仏の浄土と違はぬ様に、同じ様にと云ふ事を願ひ、普く一切の衆生を救ひ度いと云ふ事を念じて、そしてその名は顕れて十方に達すると云ふ事にな

る。十方世界にその名が聞えると云ふ事になつて、そして億の如来、沢山の仏様におつかへ申し上げて、飛んで行つてあらゆる国に遍く行きわたる。そして仏様を敬ひ自分の心には喜んで、そして又安養国に還つて来るのであると云ふ言葉でありますが、こゝで又私かう考へますがどうでありませう。「飛化して諸刹に遍し」とあります。飛んで、これはお経の他にも出てゐますが、一寸の間に十方世界に飛んで行つて、諸の仏を供養し奉ると云ふ事が出来て居るのでありますが、それは飛んで行つてと云ふ言葉をつかはれてありますけれども、どうでありませう。こゝは華厳経の毘盧舎那仏がお釈迦様と云ふ事になつてをりますが、この華厳経の毘盧舎那仏、釈尊は菩提樹の下の御座をそのまゝ離れず、立たず、動かずに、何時の間にか何々天に行つてをられる、他化自在天だ、何だといらつしやる所が変つてゐる。それは一寸理窟ぢや考へられん事でありますけれども、あれがやつぱり仏の境地でありませう。今の世界の人間の様に飛行機で飛び廻つて何時間でアメリカまで行つたと云ふ様な事でなしにであります。日本国なら日本国にじつと坐つてゐてそして世界の姿が定つて行く。首相がアメリカやスランスに飛んで廻らなければ物事がならんと云ふのは、これは人間の最も俗の俗なるものでありまして、仏様の世界はさうぢやない。釈尊はじつと菩提樹の下にいらつしやる、そして何処にでも行つていらつしやる。飛行機に乗つて飛んで行くのぢやない、じつと坐つたまゝであります。これは実に味ひの深いところでありまして、人間の世界でも結局さうならなくちや嘘でありませう。やつぱり本当の大政治家と云ふものならばその国その自分の座に坐つてゐて動かないで世界の国々がとゝなうて来る。さう云ふ事にならなければ嘘でありませう。だから私なんかもともと日本の国と云ふものを理想的に考へてゐるものでありますから、やつぱりいくら民主々義でも民主々義なんか云ふのが悪いのであつて、民主々義と云ふ名のもとにあるいゝ事が入れられてゐるそれは結構でありますけれども、けれども、この日本の天皇がその位にましまして、そして日本国の大首相が静に日本の国の政事を行つてゐる。そして飛行機で飛んで行つたりしないで自然と世界の姿がそれ〴〵にとゝなうて来る、さう云ふ世界を私はむしろ夢の国かも知れませんけれども夢想してをります。さう云ふのが理想であると思つてをります。私は政治の世界の事がわかりませんからあまり立ち入つた事は申されませんが、さう云ふ事を考へてをるものでありますから、こゝでも何も飛行機で飛んで行くと云ふ様な事ぢやない。飛んで行くと書いてありますけれども、華厳経の縮約が大無量寿経でありますから解釈する上には私共の考へを華厳経に向けて解釈しなければなりません。やつぱり菩提樹下の釈尊がそのまゝで一切の世界においでになる、かう云ふところが本当で

ある。やつぱり無量寿経に於いてもさうであると云ふ風に感じますのであります。

そのあとは誡めを云はれるのであります。善本が無ければ経を聞く事は出来ない、清らかに戒を保つ者が正しいみ法を聞く事が出来ると。その次に私が気付きました事は、「曾更て世尊を見奉りし者則能くこの事を信ず」と。信ずる様になる人間を云ふものは何時か自分は忘れてゐるけれども昔世尊を見奉ると云ふ事があつたに違ひない。そのあとの方にも「宿世に諸仏を見奉る者」とあります。前の生、前の前の生にもろ〴〵の仏を見奉つた者がこの教を信ずる様になるのであると。で「憍慢、弊、懈怠は以て此の法を信じ難し」非常に憍り高振つた傲慢な人間、それから怠けた人間と云ふものはかう云ふみ法を信ずると云ふ事はなかなかむつかしいと云つて、実はその憍慢の者、懈怠の者を問題にしてこれが何とかならなくちやと云ふ事が仏の御心であると云ふわけであります。

その次はちつとひどく「声聞或は菩薩、能く聖心を究むる莫し」に、声聞と云ふのは何時も申します通りに仏の教を唯何と云ひますか、形式的に聞いてをりまして、み声に聞いたまゝを自分がそれを法律であるかの様に守つて行けばよろしいと考へてをる人が声聞であります。そんなのは駄目だと。これは近角先生が生きておいでになつた時にホツと嘆息して私に仰言つた事がありますが、「どうも福岡県辺りには近角宗と云ふのが出来て困る」と。成る程さう云ふ事はあつた様であります。それは近角宗と先生が仰言つたのは、近角先生に対して声聞の態度で以つて先生の信仰上のみ教を聞いてをつた、さう云ふ人々を嘆息なさつたのであります。こゝではさう云ふ声聞或は菩薩でも聖心、仏の心と云ふものがよく〴〵わかるものぢやないと。生れながら盲目である、さう云ふ人が人の心を聞き人を導いて行かうと思ふのと同じ様なものであると。声聞、菩薩までこゝではたゝかれているわけでありまして、菩薩と云ふのは前に述べましたやうに仏陀のひらめきの象徴でもあり、しかも仏の境界を自分の理想としていそしみ励んで行く、これが菩薩であると云はれてありますが、その菩薩もこゝではたゝかれてゐると云ふのは、この菩薩もう一歩だと、仏の御心ではもう一歩だ、もちつとうんとたゝいてやらなくつちや駄目だと云ふ様なお心持ちでかう云ふひどい事を云はれるわけであります。だからひどい事を云はれる間が花でありまして、それからまあ先に花田さんのお話もありました、賞められたら駄目だ、お前は信仰が立派であると賞められる様になつたら人間は駄目だと云ふお話がありました。成る程さうであります。それでお前の様なもの信仰になつとるかとたゝかれる、それがいゝのであつてその間はまだ生命があると、お前は立派な信仰だと持ち上げられる様になつてはもう人間はおしまひだ、信仰問題もかう云

ふ事になるのでありませう。だからつまり仏様が私共人間の世界に活を入れてやらうと云ふお心持ちであります。

そしてそのあとに「如来の智慧海は深広にして涯底無し」でありまして、非常に広々としてその智慧の海といふものは果しないものである。声聞や縁覚の知るところぢやない、「唯仏のみ独明了せり」、かう云ふと何だか自分はこつちの方でちやんと覚つとるぞ、お前達はそつちだと、かうぢや無いのであります。此処まで何故来ないかと、広大無辺の世界が開けてをる、此処までどうしても来なくちやならんと云ふ事を逆に言はれるのであります。唯仏のみ独明了せりと云はれると、仏様はそんなものか、我々にはとても及ばんから我々は我々だ。かうなつたら今叱られてる声聞なり縁覚なりになつてをる事になるのでありますから、やつぱりかういふところの受け方、仏様のお言葉の受け方と云ふものはなか〳〵むづかしいところだらうと思ふ。それで一切の人々が一生懸命になつて何年も長い間考へても、とても仏の智慧の無辺際を知る事は出来ないと云ふ様な事を云はれてある。だからこれは求道無限であつて道を求めて行くといふ事は此処迄と限りのあるものぢやないと云ふ事を次に云はれてゐる。併しながら本当に道を求めて行くものは自分の親しき友であると。世界に満ち〳〵てゐる火の中も通り過ぎて必ずこのみ法を聞く様にせよと。そして仏道を成就してそして生死の煩悩の流れを救ふ、或は度するとも云つてあります。生死の流れを渡つて涅槃の岸に着くといふ事にならなければならぬ。さうなる事をしんから乞ひ願うて「世界に満てらん火をも過ぎて」といふところも非常に強い御言葉でありまして、よく引かれる御言葉でありますが一方から云へば私共はさういふ風に叩かれなければなか〳〵眼が醒めぬ人間であると。かういふ風に仏様は、何でせう。御姿を仰ぐと始めの様に欣笑し給うてあります、何とも云へないいゝ笑ひ方をして、そして私共をひどく叩いて下さる、それが仏様でありませう。

さういふ事でありまして東方偈といふものはかねて私うつかり唱へてをりましたけれどもそのお心持ちをだん〳〵考へてみますと、少くとも私として今の様な色々の点を感じますのであります。さうなつて来ると東方偈といふものが今迄より尚一層有り難くなります。近角先生の求道学舎で何時も始めに唱へられましたのが今の偈文であります。それも成る程と思ひますし、近角先生御自身がこの「覚了一切法。猶如夢幻響」の所を一心になつてお話しになつたそのお姿も今私思ひ浮べられる様になりますのであります。色々の点で今晩私お話させて頂いて私自身が非常に得を致しましたのでありまして、この味ひをいふものが色々の結構な味ひがあるといふ感じを持つのであります。大体マアそれだけに致しましてあとは皆様にお話を伺ひたいと思ふのであります。

昭和廿九年九月

歌心その折々

柳瀬留治

作歌の楽しみ

歌を作るといふことは楽しいものではある。然し高度が加はると生みの苦しみの伴ふのはまぬがれない。一般の娯楽だと苦の伴はぬものもあるが、さうしたものは生命を打ち込むまでの深さをもたず、すぐ飽きが来る。元来苦は楽しみに対するもので、単に楽しみ丈のものでは楽しくなくなる。

作歌の楽しみにも作者の境地によつて様々の段階がある最初は定型内に物を言ひ得た喜びであり、次には思ふ事の表し得た喜び、第三には気分が出し得た所にあらう。この段階に入ると楽しみも深くなるが、従つて苦心もいよ〳〵大となつて来る。それがどうにか表し得た喜びは又と忘れ難いものである。それが病み付きになつて我々爾来五十年捨て難いものとし続けさせられた。其間勿論行詰りにぶつかつたが、止め切れずに来た。それは捨て難い喜びを知つたが為である。

短歌に限らずすべての成長には古き皮を脱ぎ捨てる苦しみがある。作歌も同様、どうにか一通り詠めると直ぐ殻が出来、生き〳〵した想が湧いて来なくなる。そした時によく止めて了ふ。一旦止めても止め切れず又数年にして始める人がよくある。その後悔をよく聞くことがある。なかには歌は内から自然に湧いて来るものとし、湧くまで作らぬ人もある。

歌心の動くといふ事について空穂先生は

『心持が動いて来なければ作れるものではない。……暇さへあればさうなつて来るといふものではなく、動くやうにしなければ動かないものである。……心の張つた時に初めて動くものである。……即ち作歌の修業は先づ第一に気を引締めて張らせる修業をするにある。……真剣になる修業をすると眠つてゐた心の誠が眼を覚まして来るばかりではなく、従来は感じられずにゐたことが、次ぎ〳〵に感じられて来るやうになつて、その人の精神が自然に豊かになり、高まるものである』

といつていられる。

そこで年に一度か二度歌心が動き作歌をし、他は休む人

も心を緊張さす『こつ』を心得て、さあ作らうと腰をあげると必ず詠める。相撲取が制限時間で立上らされるが力一杯とれると同様、やや出来不出来はあるが詠めるものである。それによつて休詠なしに続けられる。これは前の断続作歌の人も同様である。大体中途で止める人は慰み半分の人と、行詰りを打開する熱意の欠けた人、生活に負けて了つた人のやうである。大体に止める人に器用で楽々一通り出来る人に多い、要するに気変りのする人、意志の弱い人で、何事も初心を貫徹出来ない人といつてよい。

第四の段階になると、表現の上に第二の自己といつたものが表し得て、作品と作者とが相対し語る如き喜びが得られ、芸を友となす迄に至ると、世の名声を意とせず、真の歌が詠めて来る。

此頃、短歌は社会に迫るものでなければならぬ、でないと滅亡するといふが、歌は論文ではなく、叙情詩である。おのれに対し欺かざる誠でなければ土偶に等しい。先づ自らの真実であつて社会に響くものである。おのれにひびき感慨をもつこの喜び、それが社会が読んで感銘する喜びそのものである。

卅一年、二月号短歌草原巻頭言

芸術は心の泥の昇華にある

人の短歌作品を見てゐて屢々思ふことである。常識的に外面から一渡り事象を眺め表現した程度のものが可成りある。人も我も現実生活では可成り内心には複雑な悩みを持つて居りながら、表面は平気をよそほつて生きてゐて平常に見える。その外面だけをとらへるからであらう。

……苟くも芸術といふ以上、常識の皮を破り、その内部に侵入しなければ、詩は掴めないのである。

そこで私は聞きたい。諸君は烈しい現実生活に処してゐて、内心に矛盾や抵抗を感じませんか、心に不安をもちませんかと。

諸君は現代の烈しい中に生きようとし環境に適応しようとして努力してゐるであらう。殊に真に生きんとする作歌人には従来の習慣や惰性で安易に過して行けないでせう。心の均衡が破れて不安に陥つたり、複雑な欲求のために、心が危機に陥ることはありませんか、よし経済生活が楽な環境にあるにしても、人間としての精神生活に於て、自己に対する不満や葛藤で心が危機に陥ること があらうと思ふ。この心の危機、それこそ真の芸術、真の宗教に入るの正機であり、その母胎をなすものである。

此頃コンプレックスといはれる。己の欲望や、その抑圧抑制や不安のやり切れないもや〳〵。それによる心の危機

を諸君はどうして脱却しようとしてゐますか。作歌人諸君は神経が繊くて何等かの傷を持ち、気の弱い方で、世の烈しさに適応し難いであらう。ことに病弱な人に於ては猶の事である。

やりきれぬからとて逃避メカニズムに陥つてゐても解決のつくものではない。病気に逃げ込む者、心の不安を繁忙の中へ逃避する者、空想や夢に逃避する者、愛に逃避する者、競輪、パチンコ、酒、自殺、そんな逃避は真の解決でなく昇華でなくてはならない……。

昇華といふは、そのもや〳〵を真に捉へてそれを芸術創造とし、生きた作品にすること、己の息苦しくやり切れぬものを転化し、のび〳〵と自由に発揮し築き上げる事で、不安不自由を脱して心的自由の世界を築くことで、心理学者の云ふメカニズムでもなく、消極の逃避でもなく積極的な創造なのである。

心の破綻や不安のもや〳〵の厭な障害が誠に近代芸術の母胎をなすものである。諸君さうした心の泥を昇華して吐き給へ。生き返つた様に心身は清々し、生きた創造が出来る。蓮は泥から出でて浄白の華を咲かす。そこに煩悩の泥から生じて、能く涅槃の浄華を開く仏陀を象徴する。

三十一年、七月号、短歌草原、巻頭言。

獅子王の話

ジャータカ物語

遠い昔の印度の国の物語であります。その頃、西の海の近くにベールヴ樹の交つたタラ樹の林があつて、そこに一匹の兎が棲んで居りました。

或日、彼は食物を持つて帰り、タラ樹の大きな葉の下に寝ながら考へました。……〝若しこの大地が壊れたら自分は何処へ行かうか？〟と。

この瞬間でありました。よく熟したベールヴの実が一つガサツと音を立てゝ落ちて来ました。

その音に驚いた彼は〝クスハこそ、大地が壇れるのだ〟と思ひ、あはてふためき立ち上つて後をも見ずに逃げ出しま

した。
彼が死の恐怖にかられて懸命に逃げて行くのを見た今一匹の兎が、ビックリして問ひました。
『君、一体どうした！。　なにをそんなに恐がつて逃るのだい？』
けれども彼は
『聞いてくれるな君』
と叫んだまゝ振り向きもせず去つて行きましたので今一匹の兎は
『君、何だ！何だ！』
と云ひながらあとを追つて走りました。彼は
『大変だ！こゝで世界が壊れるのだ』
と叫んで走り続けました。
かうして又一匹がそれを見て走り、更に一匹がそれを見て驚き、終に十万の兎が一緒になつて逃げて行きました。
それを一匹の鹿が見つけ、又一匹の猪、一匹の牛、一匹の水牛、一匹の犀、一匹の虎、一匹の獅子、一匹の象が見て
『これは一体何事だ！』と口々に問ひ『こゝで世界が壊れるのだ』と次々に聞かされて、皆一散に逃げ続けました。
かくして次第に広い林の中は逃まどふ獣の群で充ち〳〵て了ひました。

この時、一匹の智慧の優れた獅子王が森の奥深く住んでをりましたが、この大勢の者が世界が壊れると云つて逃げて行くのを見て、
〃その様な事は決してあるものではない。これは確かに皆の者が何か聞きそこなつたのであらう。これは私が力を出さないと、彼等は皆身を滅すかも知れない。私は皆の命を完うさせねばならぬ〃
と考へ、獅子の速さを以て、真先きに山の麓へ行き、三度獅子吼いたしました。皆は獅子の怖しさに慄へて、一所にかたまつて立ち止りました。獅子は皆の者に向つて
『何のために逃げるのだ』
と問ひました。
『世界が壊れるのです！』
『誰がその壊れるのを見た』
『それは象達が知つてゐます』
獅子はそこで象共に問ひましたが
『我々は知らない。あの虎達が知つてゐる』
と云ひました。虎達も亦
『我々は知らない。それは犀達が知つてゐます』
と云ひ、犀達は
『水牛共が』
と云ひ。水牛共は『猪達が』、猪達は『鹿共が知つてゐます』と云ひ、鹿共は、

『私達は知りませぬ。兎達が知つてゐます』
と云ひました。兎等に問うて見ますと
『これが申しました』
と云つて最初の兎を出しました。
獅子は彼に向ひ
『君世界がどうして壊れると云ふのか』
と問ひました。
『ハイ。お頭目、私がそれを見ました』
『何処に居てそれを見たのか』
『お頭目、海の近くにあるベールヴ樹の交つてゐるタラの林の中で見ました。私はそこの叢の中で寝ながら、フト、若し世界が壊れたなら、その時は何処へ行かうかと、と考へました。さうすると、その瞬間に世界の壊れかかる音を聞いたので、私は夢中で逃げたのです』
これを聞いて獅子は考へました。
〃これは確かに、そのタラ樹の葉の上にベールヴ樹の実の熟したのが落ちてガサツと云ふ音がしたのをこの兎が聞いて大地が壊れるのだと思ひ違ひをして逃げたのに相違ない。実際の所を一つ探つて見よう〃と。
そこで獅子は多勢の者をなだめて
『私はこの兎が見た場所で大地が壊れてゐるか壊れてゐないか、実際の所を探つて来よう。私が帰つて来るまで、皆こゝに静かに待つてゐるやうに』
と云つて、兎を自分の背に乗せ、又獅子の速さで駈け去り、タラ樹の林で兎を下して
『サア、君が見た所を見せてくれ』
と云ひましたが、兎は怖しさにふるへて
『お頭目、それはとても出来ません』
『サア来い、少しも怖いことはない』
併し兎はベールヴ樹の下に行く事が出来ないで、その傍に立つて、恐る〳〵指ざして
『これが、ガサツと音がした所です』
と訴へました。これを聞いて獅子は、そのベールヴ樹の下へ行き、タラの葉の下の兎の臥てゐた所と、タラの葉の上に落ちてゐるベールヴの熟した実を見せて、世界が壊れたのではないことを納得させて、再び兎を背に乗せて、獣共の集つてゐる所へ帰つて来ました。そして総ての事情を語りきかせて獣共一同を慰め
『君等は何も怖がることはないのだ。
他人の声を聞るもの、懶惰を第一とするもの、これ等は他人に頼るのみである。
道を修め、よく自らを制する者は、この様に他人によつて惑ひ騒ぐことはない』
と戒めて、各々のすみかに帰らせました。この獅子王こそお釈迦様の菩薩としての御修業中の姿でありました。

編集後記

八月六日の、近角常音先生の第四周忌を迎へ、感無量であります。年々に、師ましまさば〳〵の感も深く、それにつけても浄土返照のひかりもいよ〳〵深く蒙ることであります。また奇しくも広島の原爆の日にあたつて居ります。

仙台の成瀬政男先生がしきりに、近角先生の全集が是非出て頂きたい、と渇望され、それは日本のためにも、更に世界のためにも、と申されてゐる由、伝聞いたし、感銘深く承りました。

成瀬先生が昨年、ベルリンに行かれた時、仏教と政治、仏教と社会事業、仏教と芸術等々の質問をうけられた時、『日本の仏教はさういふことぢやない。自分自身が完全に救はれることなのだ』と答へられたら、仏教の傍観者達も非常に感じてくれましたと、これは私が直接に先生から承つたことであります。その直道を開示して下されたのが近角先生でありました。

時機すでに熟し、先生の全集が、我身にひかりをうけたいと切に願はれる人々の御手にはやくとゞけられる日の近かれと念じてやみません。

——○——

△東方偈の御講話はこれで終り次号は『往生について』の大経讃を頂きます。何年かの間、茅屋に御立ち寄り下さつて、福島先生が大経の秘奥を御話し下されましたことは、誠に内外の御縁の御恵みと申すほかありません。去る六月には大経の五悪段の御講話もすでに頂いて居り、この大経の御講話完成の日には、大無量寿経の講話の全体をまとめて、出版させて頂きたいものとひそかに念願して居ります。先生は東京都調布市仙川町七九四番地が御住居であります。

△歌心その折々は、短歌草原誌の巻頭言を二つ頂きました。信の上の調べの妙を柳瀬先生から知らせて頂き、皆様に御照会申し上げました。東京都渋谷区代々木本町七三一が御住居です。

△闡提への救ひは、聞いても聞きても聞き甲斐のない、常に仏にそむく者の上に我身を感じ、歎異抄の九条にその者の救ひの存するを仰ぎ、そこに、祈る力もなき者への救ひ、唯一無二の無碍光を讃仰いたしました。

——○——

御案内

毎月、第一、二、三日曜、午後一時半、日曜講話。南区駈上町二丁目、一道会館。市電、新郊通一丁目。

毎月十三日、熱田区幡野町願入寺、午前午後、法話会。

毎月廿四日昭和区小桜町教西寺、午前午後、法話会。

八月二十六日、午前、岡崎東別院同朋会館歎異抄讃仰、同日午后、岡崎市藤川町光和会例会。

定価 一部 十七円（送共）
半年 百円（送共）
一年 二百円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集・発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 奥川正生
名古屋市南区駈上町二ノ二八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光 第八巻第八号 昭和三十一年八月十六日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月十六日 第三種郵便物認可